

鰻の匂い

あるところにとってもケチな男がいました。男は鰻屋のそばへ引越してきて、毎日毎日、鰻屋が鰻を焼く匂いを嗅いで、

「くんくん、ああ、いい匂いだ。美味しいねえ」

と、言いながら、鰻の匂いだけをおかずにして、白いご飯を食べていました。

それを見ていた鰻屋は、良いことを思いつきました。

あるとき、鰻屋は男のところにやってきて、男にお金を払ってほしいと言ったのです。

男はびっくり。

「ええっ？お金を払うっていったって、私は匂いを嗅いでいるだけだよ。なんだいこれは？」

と、勘定書きを見ると、『鰻の匂い嗅ぎ代 6000円』と書いてあります。

男は、

「ええっ？鰻の匂いを嗅ぐだけで金をとるのかい？うーん、しょうがない。わかった、わかった」

と、財布から金を出すと、手の中でジャラジャラ音をたてました。

「さあ、匂いの代金は音で払うよ」